

# 職場における交通安全指導 Part.32

## 事故事例に学ぶ... 1

人は危険に直面した時、可能な限りの回避行動を本能的にとろうとします。しかし、それでも間に合わない時に事故は発生します。

事故を防ぐには、危険を感じてからでは間に合いません。常に「かもしれない」運転によって危険を予測し、何が起ころうとも回避できる態勢をとる必要があります。

事故の多くには、見落としてしまった“事故からのサイン”があったはずで、今回より、実際の事故に基づいた安全指導をご紹介します。

### 工場の門を出た際、忘れ物に気付いて慌ててバックし後続車と衝突

#### 事故の概要

##### 発生状況

日 時:平成9年5月某日 午後7時20分頃

天 候:曇り

発生場所:横浜市戸塚区の工場出入口前県道

道路状況:車道幅員7mで片側1車線の見通しのよい直線道路。道路に面して工場の出入口がある。

##### 事故の当事者

A(4tトラック):年齢41歳・男性・運転歴21年・事故歴1回(追突事故)

B(乗用車):年齢35歳・男性・運転歴15年・事故歴なし

##### 被害状況

A:人身なし・物損なし

B:人身なし・物損(左フロント、フェンダー、ボンネット他破損)

### 事 故 状 況

工場への納品を終えたAは、営業所に戻るため車に乗り込んだ。工場の門を出るとハンドルを右に切って県道へ。ハンドルを戻しアクセルを踏み込もうとした時、工場内に忘れ物をしてきたことに気が付いた。

「しまった!」と思ったAは慌ててブレーキを踏み、チラッと右後方を見るなりギアをバックに入れ、ハンドルを右に切りながらそのままアクセルを踏み込んで門に戻りはじめた。そして同工場からAに追従してきた乗用車Bに衝突した。

#### 事故の原因と防止策

慌てたため、一つのことに心を奪われてしまった

この事故は、Aが忘れ物に気づき慌ててブレーキを踏んだときから始まっています。「忘れ物をした。取りに戻らなくては!」と一つのことに気持が奪われたため、心に死角ができ、バックに潜む危険に注意が向かなかったことが、事故の第一要因です。

後方の安全確認が不十分だった

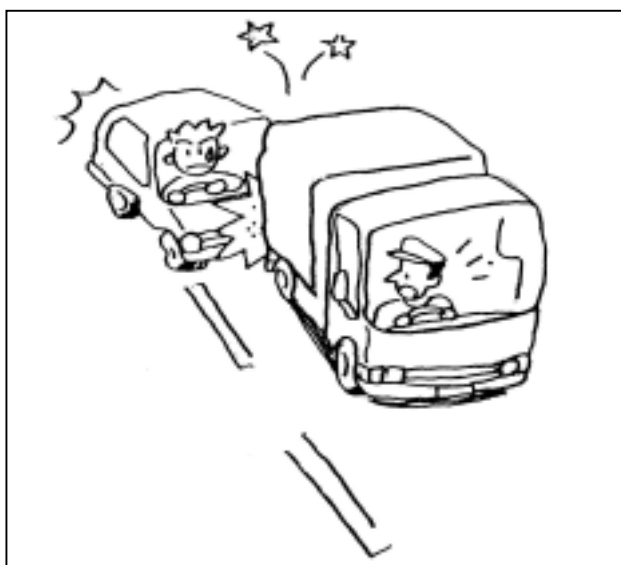
自動車は前方に走ることを目的として設計されています。ですから、運転席から後方への視界は、前

方への視界と比較して極端に狭くできています。特に大型トラックの場合は、サイドミラーで見通すことのできる範囲以外、車体後方のほとんどが死角となります。そのため、バックは難しくさらにハンドル操作などの感覚がつかみにくいという不利な点も重なることから、多くのドライバーが嫌がる傾向にあり、交通量が多かったり危険度が高い道路では、ほとんどのドライバーがバックを控えているはずです。

この事例では、Aはいつもの慣れた道で、バックに対する危険認識も甘くなり、そのために不十分な安全確認の上での動作を行ったと考えられます。

できればバックはしないほうが好ましく、やむを得ずの場合は必ず降車して、自分で安全確認をする位の気持ちを持つことが大切です。

本当に上手なドライバーは、自分の進む方向は自分の目で安全確認し、「絶対に大丈夫だ。」と確信してから進みます。つまり、車の中から安全確認ができないバックの場合、降車確認が絶対必要だということになります。いちいち降車確認するのは面倒だというドライバーがいますが、運転する以上、降車確認も仕事のうちだという意識をもつことが大切です。



## 安全なスピードでバックしなかった

後方の安全が十分に確認できない中、一気にバックするのは大変危険です。

Aは、後方の安全を十分に確認せず、時速約10kmでバックしたのですが、たとえ低スピードであっても、後方の安全が十分に確認できていなければ事故につながります。

スピードはできる限り抑え、人の歩行速度程度(3~4km/h)でバックしながら、何度か車を止め、死角部分の見通しが効くようになった時点で、あらためて歩行者や後続車などの安全を確認することが大切です。

### バック時の安全運転のポイント

バック時の降車確認の徹底。面倒がらずに仕事のひとつと考え実践すること。

死角の大きいバックでは、人が歩く速さ以上のスピードを出さない。

一つのことに注意を奪われない。何か一つに注意が集中すると、心にも死角が生まれる。一呼吸おいた運転で、心の死角をなくすこと。

バックブザーに頼らない。耳の遠い老人や、音の意味がわからない子供には効果がない。